

青谷上寺地遺跡SD38出土 弥生時代後期人骨群の年代に関する検討

人骨群の形成時期と期間について

Reconsideration of Human Bone Chronology Excavated from the SD38 Trench
at Aoyakamijichi, Tottori Prefecture, in the Late Yayoi Period :
Regarding the Formation and Span of the SD38 Burial Context

HAMADA Tatsuhiko

濱田竜彦

I はじめに

鳥取市青谷町に所在する青谷上寺地遺跡（図1）は弥生時代を中心とした低湿地遺跡である。河川の下流域に発達した三角州に立地し（図2）、地下水位が高い埋蔵環境にあり、保存状態の良い考古資料や動植物遺体が豊富に出土する。弥生時代の人骨資料も充実しており、弥生時代後期の土器を伴うSD38という溝状遺構からは約5,323点（最小個体数109個体）に及ぶ人骨が出土している（図3）〔鳥取県教育文化財団2002a・b〕。

SD38出土人骨を対象に新学術領域研究やポネシアゲノムの考古学班が行った年代学的調査では、頭蓋骨3個体の炭素14年代を測定し、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）の較正暦年代範囲が、弥生時代後期後半の年代となる紀元2世紀台に集中することを確認した〔濱田⁽¹⁾ほか2020〕。さらに古代人DNA班によるDNA分析では、SD38から出土した頭蓋骨32個体のミトコンドリアDNAに29系

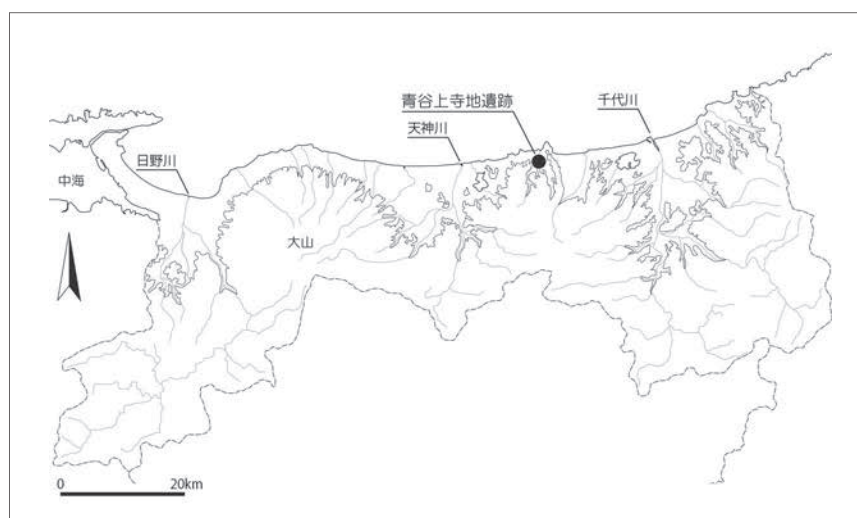


図1 青谷上寺地遺跡の所在地

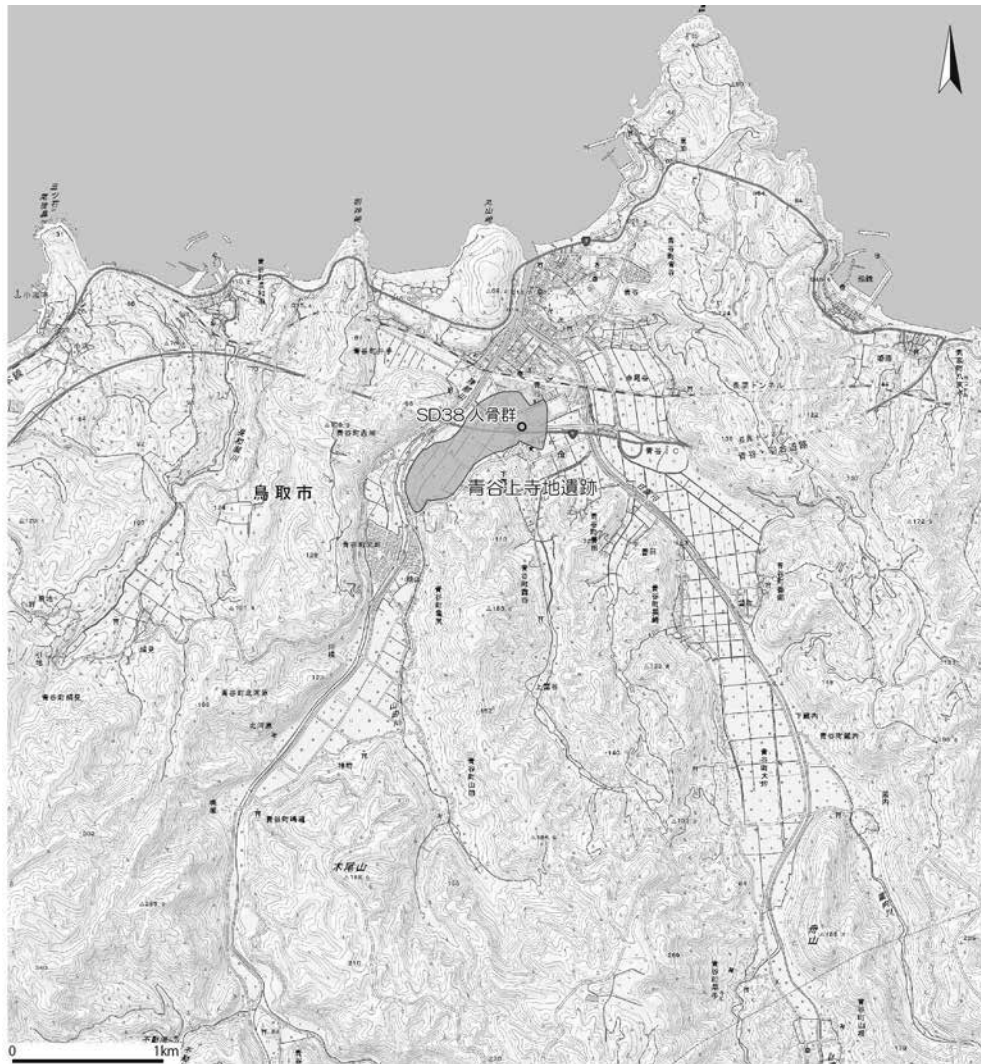


図 2 青谷上寺地遺跡の立地

統が存在する一方、配列が完全に一致する個体は 3 組しかなく、ほとんどの人骨が血縁関係をもたないことが分かった。ミトコンドリア DNA は母系に遺伝し、同一配列のミトコンドリア DNA を持つ個体は母と子、または同じ母から生まれた子ども同士などの関係にある。外部からの人の流入が少ない集団ではミトコンドリア DNA の系統が単純になり、中・近世の都市部のように外部からたくさんの人が流入する集団ではミトコンドリア DNA の系統が多様になるという人類学の研究成果がある。青谷上寺地遺跡の SD38 から出土した人骨群におけるミトコンドリア DNA の在り方は中近世以降の都市部に暮らす集団に類似している〔篠田 2019, 篠田ほか 2020〕。

では、この人骨群は 2 世紀のいつ頃、どのくらいの期間を経て形成されたのか。形成期間が長期であれば、人骨群には数世代に及ぶ人々が累積されており、短期であれば、同時代の人々が集積されていることになり、その歴史的な評価は随分と変わる。そこで、SD38 における人骨の堆積状況や土器の在り方を再検討し、この人骨群の形成時期と期間を明らかにする。

Ⅱ SD38 と人骨群

1. SD38 に関する記録

青谷上寺地遺跡では、弥生時代の活動拠点となった三角州末端の微高地の縁辺部に、木製の構造物を伴う溝が繰り返し掘削されている。人骨群が発見されたSD38はこの微高地の東側裾部に設けられた溝状遺構である。第1次調査の県道調査区8区（以下、県道8区）に位置しており（図3）、弥生時代後期前葉から終末期にかけてSD38-1、SD38-2、SD38-3と変遷し、SD38-2に人骨群が伴うことが報告されている〔鳥取県教育文化財団2002a〕。以下、SD38に関する調査時の記録を再確認する。

発掘調査報告書にはSD38-1・2・3の遺構平面図と断面図〔鳥取県教育文化財団2020a 第48・49・50図〕、人骨の平面分布図と垂直分布図〔鳥取県教育文化財団2020a 第51・52図〕が掲載されている。しかし、各段階の遺構平面図にはSD38-1、SD38-2、SD38-3の位置関係が表されておらず、断面図も個別に掲載されているので、それらがどのように重複しているのかが分かりにくい。

そこで、SD38-1・2・3の位置関係を示した遺構平面図を作成し、それに整合するようにSD38-1・2の断面図を繋いで、一続きの断面図とした（図4～6）。そして、SD38-2の平面図と断面図に人骨の平面・垂直分布を重ねた⁽²⁾（図5）。SD38-3については発掘調査報告書に断面図が掲載されていないが、レンズ状に堆積した人骨の垂直分布の上部に、およそその形状をうかがうことができる（図6）。

また、発掘調査報告書には、SD38に堆積した地層の情報として、SD38の北端（調査区の北壁）の土層断面図〔鳥取県教育文化財団2020a 第49図A-A'〕と、8区に割り付けされたグリッドの平面

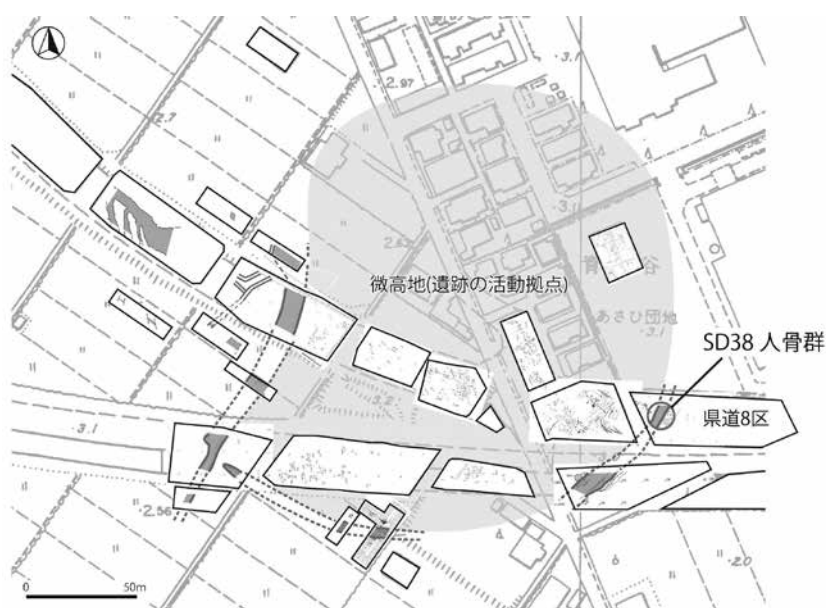


図3 SD38 と人骨群の位置

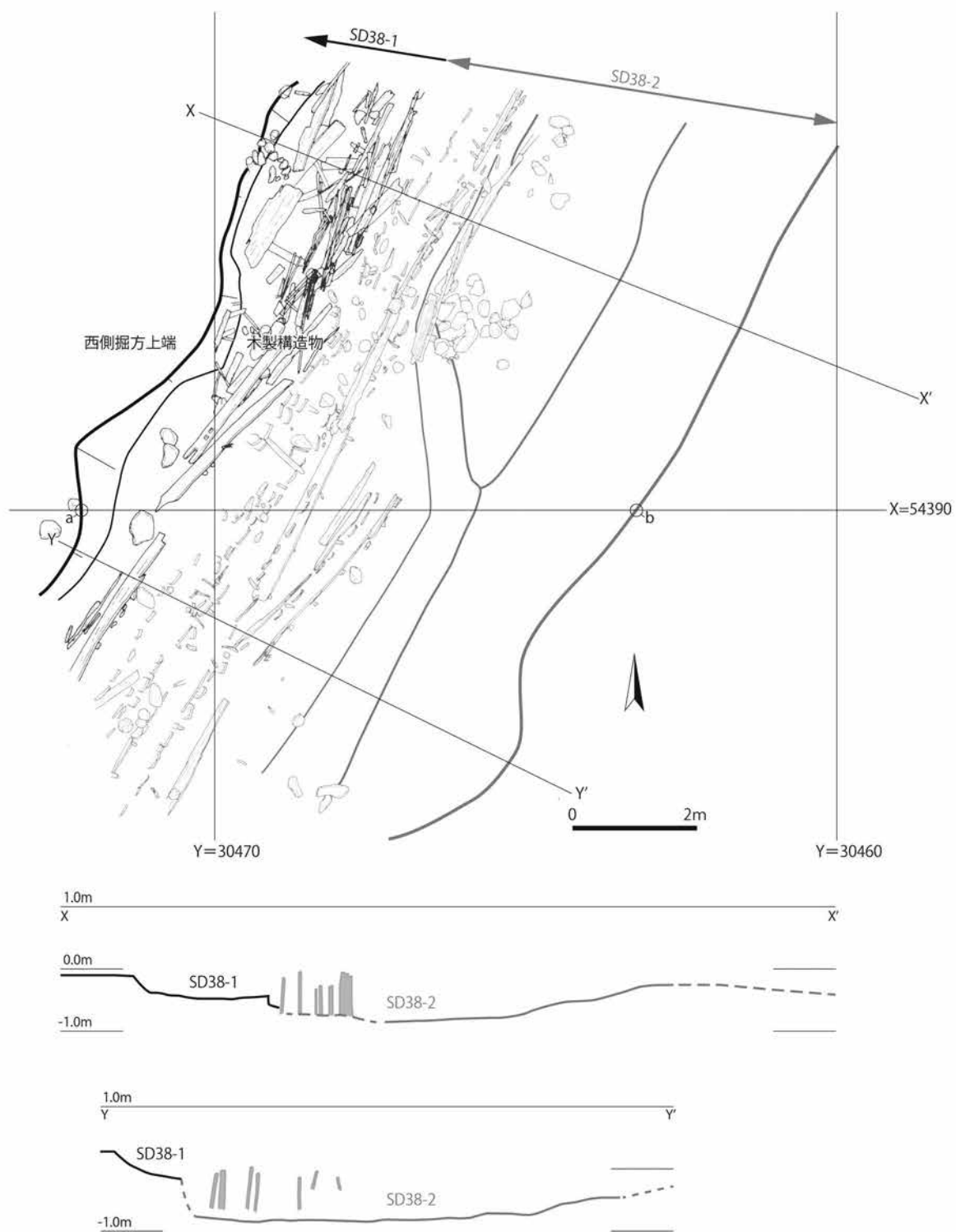


図 4 SD38-1

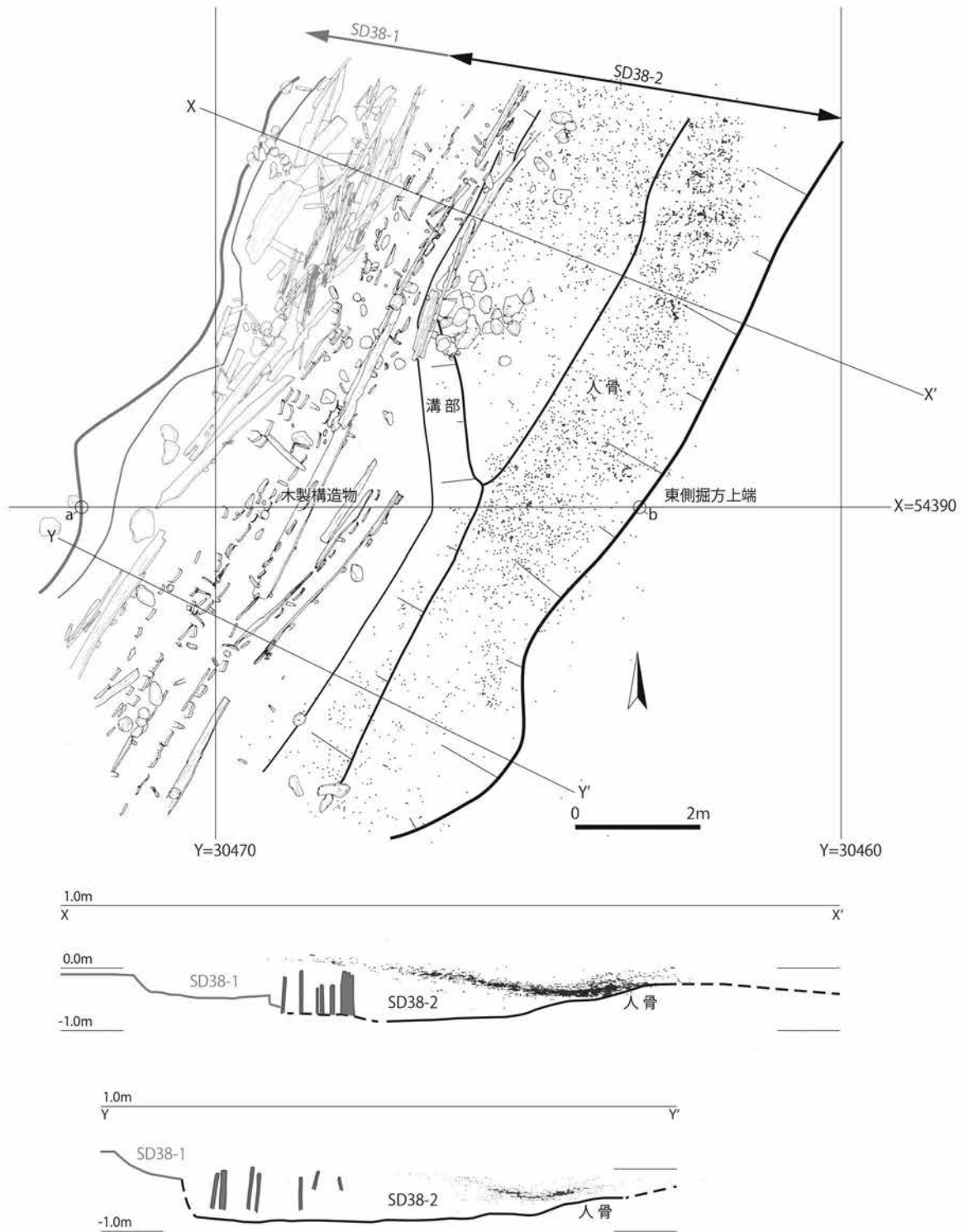


図5 SD38-2と人骨の分布

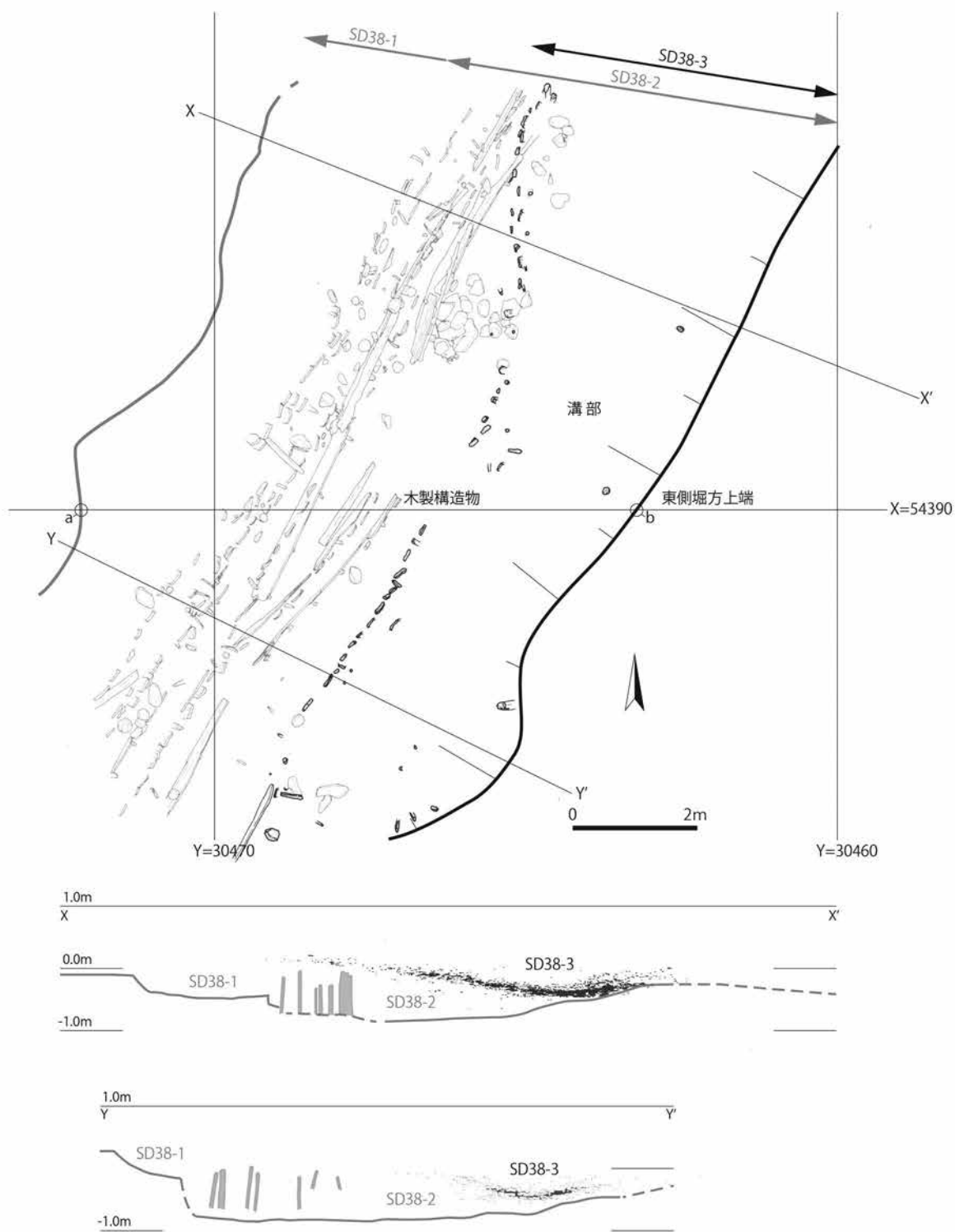


図 6 SD38-3



図 7 SD38 北端部の土層断面

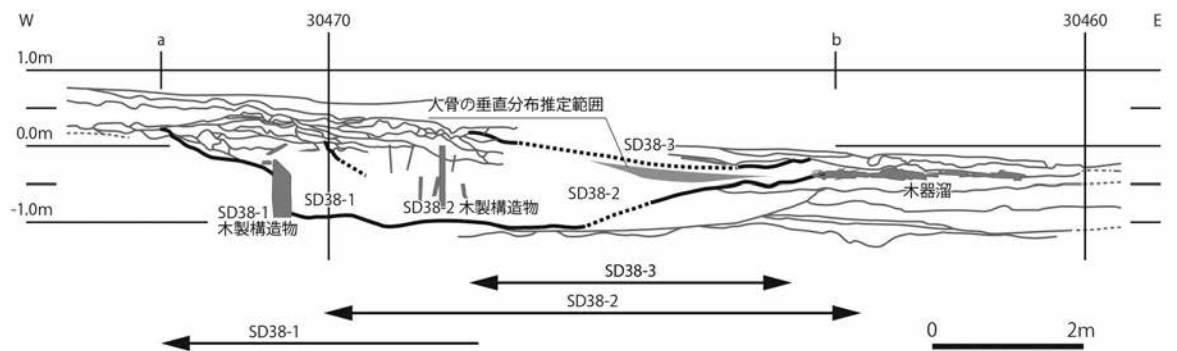


図 8 SD38 X=54390 ラインの土層断面



図 9 SD38-2 人骨出土状況

直角座標の第Ⅴ系（以下、省略）X= 54390 ラインで作成された土層断面図〔鳥取県教育文化財団2020a 第4図〕が掲載されている。

北端部の土層断面図には、SD38 内に堆積した地層が細かく分層されているが、地層の観察所見や遺構平面図との対応関係が示されていないため、SD38 北端部の土層断面図を再トレースして図7を作成し、そこに若干の補足を加えた。なお、図5・X-X' 断面における人骨の垂直分布を参考にして、人骨の垂直分布の範囲を図7の中に推定したが、人骨の堆積と分層された地層の傾斜方向が一致しない。人骨の垂直分布図は座標の記録にもとづくものなので、調査時の分層を再検討する必要があるかもしれない。

一方、X=54390 ラインで記録されているのは、県道8区を東西に貫く土層断面図である。図8はSD38 周辺を再トレースしたものである。SD38 については、全体の掘方と上部の地層の一部について記録が残されている。平面図と重ね合わせてみると、掘方の位置（図4～6 平面図a・b）は一致している。そこで、掘方と推定できる分層線を実線で強調し、不足部分を点線で推測すると共に、木製構造物の断面を図中に加えた。

2. SD38-1・2・3 と人骨群の関係

① SD38-1 と SD38-2 との関係

SD38-1 には西側の掘方と木製構造物が確認されている（図4）。木製構造物は溝の西壁の「護岸施設」と理解されており、一方の「東肩は消失」しているという。SD38-2 の護岸施設がSD38-1 の「東側に築かれる」という所見があるので〔鳥取県教育文化財団2002a〕、SD38-2 の掘削と護岸の構築により、SD38-1 の東側は大半が失われていることになる。SD38 北端部の土層断面図には、SD38-1 の埋土とは傾斜角度が異なる分層線があり、SD38-2 の掘方の候補となる（図7）。SD38-2 は、埋没したSD38-1 を掘削して造られた別の遺構といえる。

② SD38-2 と人骨群

SD38-1 を掘り込むSD38-2 には木製構造物と東側の掘方が検出されている（図5）。調査の所見には「西肩を確認できなかった」とあるが、木製構造物は「護岸施設」と認識されているので〔鳥取県教育文化財団2002a〕、木製構造物が西側の壁となり、その東側が溝として機能していたことになる（以下、溝部）。そして、この溝部は微高地側（西側）から埋まり、その後、溝部の東寄りに生じた浅い窪地（溝部の痕跡）に解剖学的位置を失った多数の人骨が堆積している（図9）。

なお、SD38-2 で発見された大量の人骨は解剖学的位置を留めず、散乱していた。これが自然堆積物であれば、人骨が散乱する状況を理解しやすい。SD38-2 の溝部を流動してきた人骨や、西側（微高地側）から流入してきた人骨が堆積していると推測できるからである。ところが、SD38-2 には水の流れがあったことを示すラミナ（葉理層）は観察されていないし〔井上ほか2002〕、微高地側に人骨の流出元も確認されていない〔鳥取県教育文化財団2002a〕。大規模な氾濫により、どこかに埋葬または集積されていた人骨が洗い出されて、土砂と共に押し流され、SD38-2 に埋まった可能性もあるが、人骨を埋めているのは粗砂や礫ではないから、多量の人骨を押し流すような氾濫も想定できない。したがって、この人骨群は2 次的な自然堆積物ではないと考える。

他にも、埋没が進んだSD38-2 に放置された大量の死体が地表で白骨化し、散乱した可能性もあ

る。地表に放置された死体は周辺に生息するイヌなどの動物に噛み荒らされたりするが、この人骨群には明らかな動物の噛痕を観察できる人骨はなく、人骨は水中または土中で白骨化したと考えられている〔井上 2002 ほか⁽³⁾〕。ただし、SD38-2 には水底に堆積する粘土層も確認されていないから、人骨は土中など、水中以外の環境で白骨化した蓋然性が高い。

また、SD38-2 の上部に堆積した人骨群の下層にも少量の人骨が埋まっている（図 5）。人骨群から 30～40 cm も下方から出土している人骨もある。それらは人骨群が形成される以前に埋まったものと推測する。SD38-2 には水が流れていた痕跡や氾濫時に押し出された土砂の堆積は確認できないので、人骨群の形成に先行して溝部に埋まった人骨も自然堆積物ではなく、この場に持ち込まれたものと考ええる。

③ SD38-3 と人骨群の攪乱

SD38-3 は人骨群の上部にあると報告されている溝状の遺構である（図 6）。断面形状は把握されていないが、簡素な木製構造物と東側の掘方が報告されている〔鳥取県教育文化財団 2002〕。東側の掘方は SD38-2 の掘方と同じ位置に認識されているが（図 5・6）、X=54390 ラインの土層断面図に示された分層線を見ると、本来の掘方は全く同じ位置にあるのではなく、SD38-2 の掘方よりも上に位置するものと考えられる（図 8）。また、人骨群の堆積にうかがわれる断面形状（図 6）や X=54390 ラインに推測した掘方（図 8）を見る限り、SD38-3 は人工的に掘削された溝というよりも、埋没した SD38-2 の痕跡を留める自然地形のようにみえる。

しかし、SD38-3 の下部に埋まっている人骨群との関係について、「SD38-3 に伴う杭」が下部にある「骨を貫いていた」という重要な調査所見がある〔鳥取県教育文化財団 2002a：p.53〕。明確な掘削を伴う溝状の遺構ではないと考えるが、SD38-3 が存在した段階に杭が打ち込まれるなどして、人骨群の表層部は何らかの攪乱を受けている可能性がある。レンズ状に堆積した人骨群の上方に人骨が散らばっているのは、その影響によるものかもしれない（図 6）。

なお、このことに関連して、SD38-2 出土人骨を子細に調査した井上貴央は、散乱する人骨の中に、同一個体の上顎と下顎、上腕骨や大腿骨の左右が近い位置から出土する事例があることに着目し、「5 m 四方の中に 10～15 体程度のペアが確認」できることから、「死体が積み重なるようにして埋葬された可能性」を考え、後世に行われた掘り返しや整地により、SD38-2 に埋葬されていた死体が攪乱されて、もとは交連していた骨が解剖学的位置を失い、散乱したと推測している〔井上ほか 2002：pp.466-467〕。

一方で、大腿骨や距骨には、同一個体の左右が 8 m 前後も離れた場所から出土している事例もある〔井上ほか 2002〕。SD38-2 に形成された人骨群を弥生時代の遺棄葬の一例と考える乗安和二三は、遺棄された死体が「腐敗の進行した種々の段階において攪乱を受けるとともに、土砂などが堆積し埋没した」とみており、「遺棄後に骨が露出した時期があって何らかの攪乱等で移動した」結果、同一個体が遠く離れた場所に分散したと推測している〔乗安 2010：pp.15-17〕。

井上と乗安は SD38-2 を葬地と認識しており、SD38-2 から出土した多量の人骨を埋葬または遺棄葬された死体とみている。双方の仮説は、人骨の散乱原因となる攪乱のタイミングを異にしているが、埋葬または遺棄葬された死体が白骨化する過程、または白骨化した後に攪乱を受けて解剖学的位置を失い、散乱したという理解において共通している。解剖学的位置を失った人骨は四方八方

に散らばっているの、散乱の原因と推測される攪乱は軽微なものではなく、著しい掘り返しを伴うものだったと考えざるを得ない。

ところが、人骨が濃密に分布するレンズ状の堆積には、著しい攪乱を受けた痕跡が明確ではない。著しい攪乱により骨が散乱したのであれば、人骨の垂直分布はもっと乱雑な状況を示すだろう。SD38-2の上部に堆積した人骨の垂直分布には、井上や乗安の仮説を支持するほどの攪乱が見えてこない。SD38-2に持ち込まれた大量の人骨は、その時すでに解剖学的位置をとどめていなかった可能性もある。この場合、人骨の散乱原因は人骨群の形成過程もしくは形成後の攪乱ではなくなるので、SD38-2に集積された人骨とその共伴遺物の多くは埋没時の位置を保っていることになる。本稿が目的とする人骨群の形成時期や期間の検討に関連することとして留意しておきたい。⁽⁵⁾

Ⅲ 人骨群に伴う土器

SD38からは弥生時代後期前葉から古墳時代前葉の土器が出土している。発掘調査報告書では、松井潔の土器編年案（以下、松井編年）[松井1997]をもとにSD38-1・2・3から出土した土器の時期が決定されており、SD38-1に「松井Ⅴ～Ⅵ期」、SD38-2に「松井Ⅶ期～Ⅹ期」、SD38-3に「松井Ⅺ期～Ⅻ期」の土器が伴い、人骨群との「関連が窺えるのは松井Ⅶ～Ⅹの段階であり、人骨の埋没時期をここに求めることができる」と記されている[鳥取県教育文化財団2002a：p.53]。この所見によれば、人骨群は土器の形態や文様の変化が4期に及ぶ期間に形成されたことになる。

以下、人骨群に関連する土器を再検討するため、鳥取県域における弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年と年代観を概観すると共に、頭蓋骨の年代学的調査によって得られた較正年代の範囲との整合性を確認し、人骨群が形成された時期と期間を考察する。

1. 土器編年と暦年代観

山陰地方では、甕や壺の口縁部に凹線文を施す土器群を第Ⅳ様式として弥生時代中期後葉に位置づけ、凹線文から変化した沈線文（疑凹線文）を口縁部に施す土器群を第Ⅴ様式として弥生時代後期に位置づけている。また、第Ⅴ様式には口縁部の上端部が拡張して、複合口縁が成立し、第Ⅳ様式には胴部下半にとどまっていた内面のケズリ調整の範囲が胴部上半から頸部に上昇するなどの変化も認められる。そして、第Ⅴ様式に盛行した沈線文が衰退し、口縁部が無文化していく土器群を第Ⅵ様式（弥生時代終末期）として弥生時代終末期に位置づけている[清水1992]。

一方、松井編年は、弥生時代中期の第Ⅲ様式と第Ⅳ様式の土器をⅠ～Ⅳ期に分け、第Ⅴ様式、第Ⅵ様式、古墳時代前期に至る土器をⅤ～ⅩⅣ期に細別する（以下、松井Ⅰ～ⅩⅣ期と表す）。そして、因幡地域（鳥取県東部）、東伯耆地域（同中部）、西伯耆地域（同西部）の編年案を提示し、その地域性にも検討が及んでいる。しかし、松井Ⅸ期と松井Ⅹ期に位置づけられた因幡地域と東伯耆地域の土器には型式の前後関係が混乱している⁽⁶⁾。発掘調査の所見では、松井Ⅸ期とⅩ期の土器はどちらも人骨群に関連するとあるので、この点は注意を要する。

そこで、本稿では、弥生時代後期以降の土器資料が最も充実しており、土器の変化を捉えやすい鳥取県西部の編年案[濱田2003・2009、高尾2020]をもとに、第Ⅴ様式、第Ⅵ様式、古墳時代前期前葉の主要器種（甕・壺・器台・高坏など）の変遷をたどる⁽⁷⁾（図10-1・2・11-1・2）。

弥生時代後期／第Ⅴ様式の土器（図10-1・2） 第Ⅴ様式の土器は、口縁部にヘラを用いた数条の平行沈線を施す第Ⅴ-1様式、沈線の条数が増加する第Ⅴ-2様式、さらに複数本のヘラをまとめたクシ歯条工具や二枚貝の復縁部または板状の工具を用いた多条平行沈線を施す第Ⅴ-3様式と変遷する。甕や壺の口縁部の形状は、第Ⅴ-1様式では口縁部上端の拡張が弱く、内傾しているが、第Ⅴ-2様式になると口縁部が上方に拡張し、複合口縁が完成する。そして、第Ⅴ-3様式には複合口縁の拡張が進み、幅広で外傾するものが増加する。器台の受部や高坏の口縁部、そして脚台部も同様に第Ⅴ-3様式に拡張が進む。甕や壺の底部の形状は第Ⅴ様式を通じて安定した平底である。

また、第Ⅴ-1～3様式は、口縁部の拡張や傾きの度合いなどから、それぞれに古相と新相を識別できる。複合口縁の拡張が進んだ第Ⅴ-3様式では、新相の段階に二枚貝の復縁部や板状工具による施文が多用され、第Ⅴ-3様式古相までは刺突を施していた甕の肩部に二枚貝や板状工具による押し引き文が施されるようになる。器台の受部や脚台部、高坏の口縁部も拡張が進み、多条平行沈線文をその全面に施す。その一方で、器台の受部や脚台部、高坏の口縁部をミガキや丁寧なナデで仕上げ、文様を施さないものも現れる。

弥生時代終末期／第Ⅵ様式の土器（図11-1・2） 第Ⅵ様式は近畿地方に展開する庄内式と併行関係にある。第Ⅴ-3様式新相の甕や壺は口縁部に二枚貝などを用いた多条平行沈線を施すものが主流だったが、第Ⅵ-1様式には多条沈線を波状に施すものが増加する。口縁部に文様を施さない甕や壺は第Ⅴ様式にも一定量あるが、第Ⅵ-1様式になると口縁部に施した多条平行沈線文をナデ消すものや、口縁部に文様を施さないものが増加し、第Ⅵ-2様式に口縁部の無文化が進む。また、第Ⅴ様式には安定した平底だった甕や壺の底部が、第Ⅵ-1様式以降は幅を狭め、第Ⅵ-2様式には小さく、不明瞭になる。器台は第Ⅵ-1様式に受部と台部の装飾が簡素になり、無文化していくと共に、脚筒部が短化し、第Ⅵ-2様式に至り鼓形の形状が完成する。高坏は坏部が鉢形や皿形になり、脚部の形状も単純化する。なお、第Ⅵ-2様式は古相と新相に細分でき、新相には甕や壺の器壁が薄くなり、器台は脚筒部の短化が進む。

古墳時代前期の土器（図11-1・2） 甕や壺の口縁端部を面取りするものが増加し、底部の形状は形骸化した平底から丸底へと変化する。器台は受部や脚台部の縦幅が狭まり、脚筒部も短くなるので、全体に扁平な印象を受けるものが増える。また、脚筒部の形骸化が進み、内面の断面形が「く」字状を呈するようになる。高坏には坏部がやや扁平な印象のものが多くなる。

以上、弥生時代後期から古墳時代前期に至る土器の変遷を概略した。松井編年との対応については、松井Ⅴ期が第Ⅴ-1様式、松井Ⅵ期が第Ⅴ-2様式、松井Ⅶ・Ⅷ期と松井Ⅸ期の一部がⅤ-3様式、松井Ⅸ期の一部と松井Ⅹ期が第Ⅵ-1様式、松井Ⅺ期が第Ⅵ-2様式、そして、松井Ⅻ期以降が古墳時代前期となる。⁽⁸⁾

時期・時代区分と暦年代 第Ⅴ-1様式古相・新相を弥生時代後期前葉、第Ⅴ-2様式古相・新相を後期中葉、第Ⅴ-3様式古相・新相を後期後葉、第Ⅵ-1様式を終末期前半、第Ⅵ-2様式を終末期後半とする。そして、弥生時代後期、終末期、古墳時代前期の暦年代については、弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式）の始まりを紀元1世紀第2四半期〔森岡1984・1996〕、古墳時代前期（布留式古段階）を紀元3世紀第3四半期と考え、弥生時代終末期（庄内式）の上限が紀元2世紀第4四半期にさかのぼる可能性を視野に入れておく〔森岡・西村2006〕。この年代観に弥生時代後期～古墳時代前期

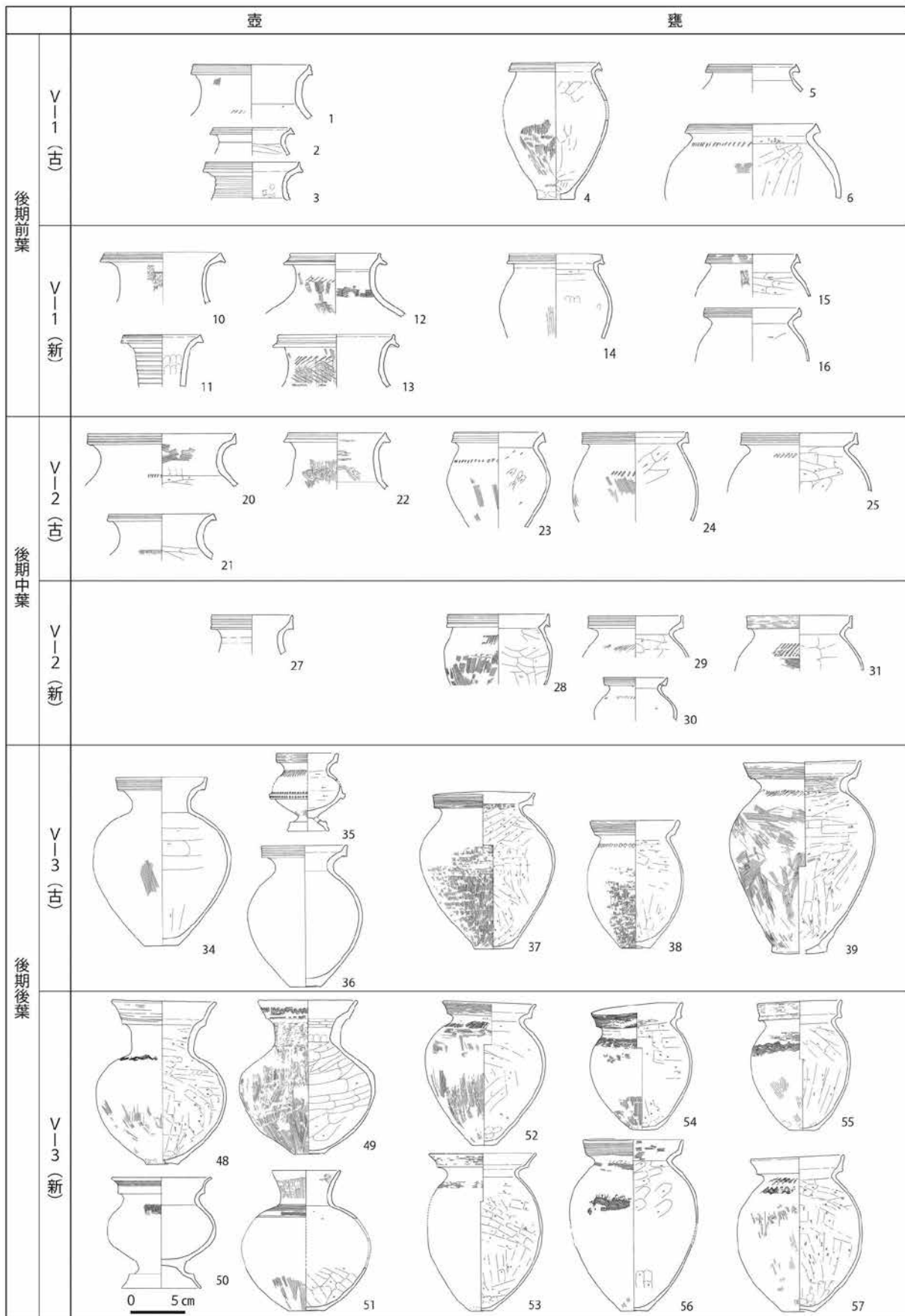


図 10-1 第V様式の土器(甕・壺)

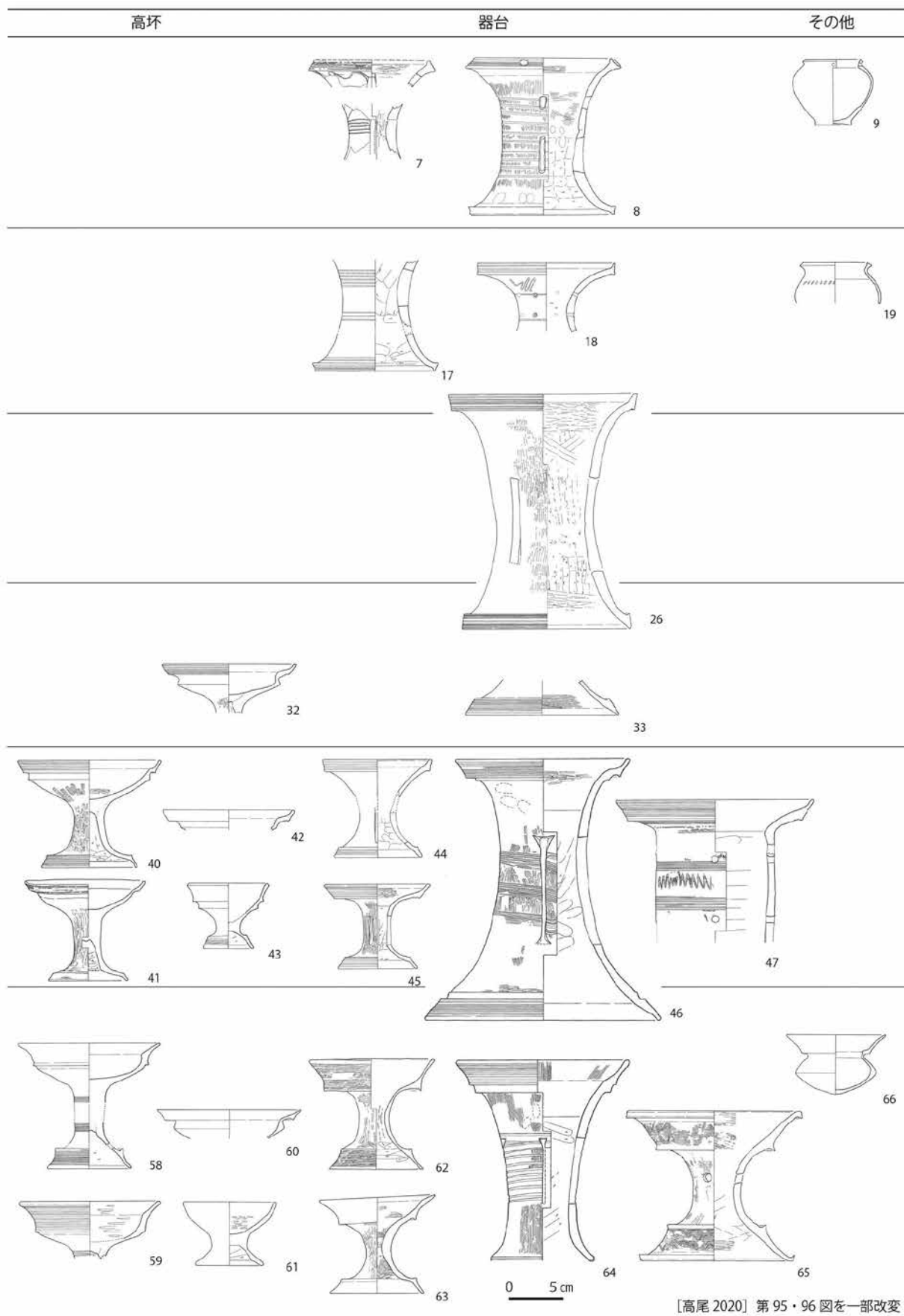


図 10-2 第V様式の土器 (高坏・器台)

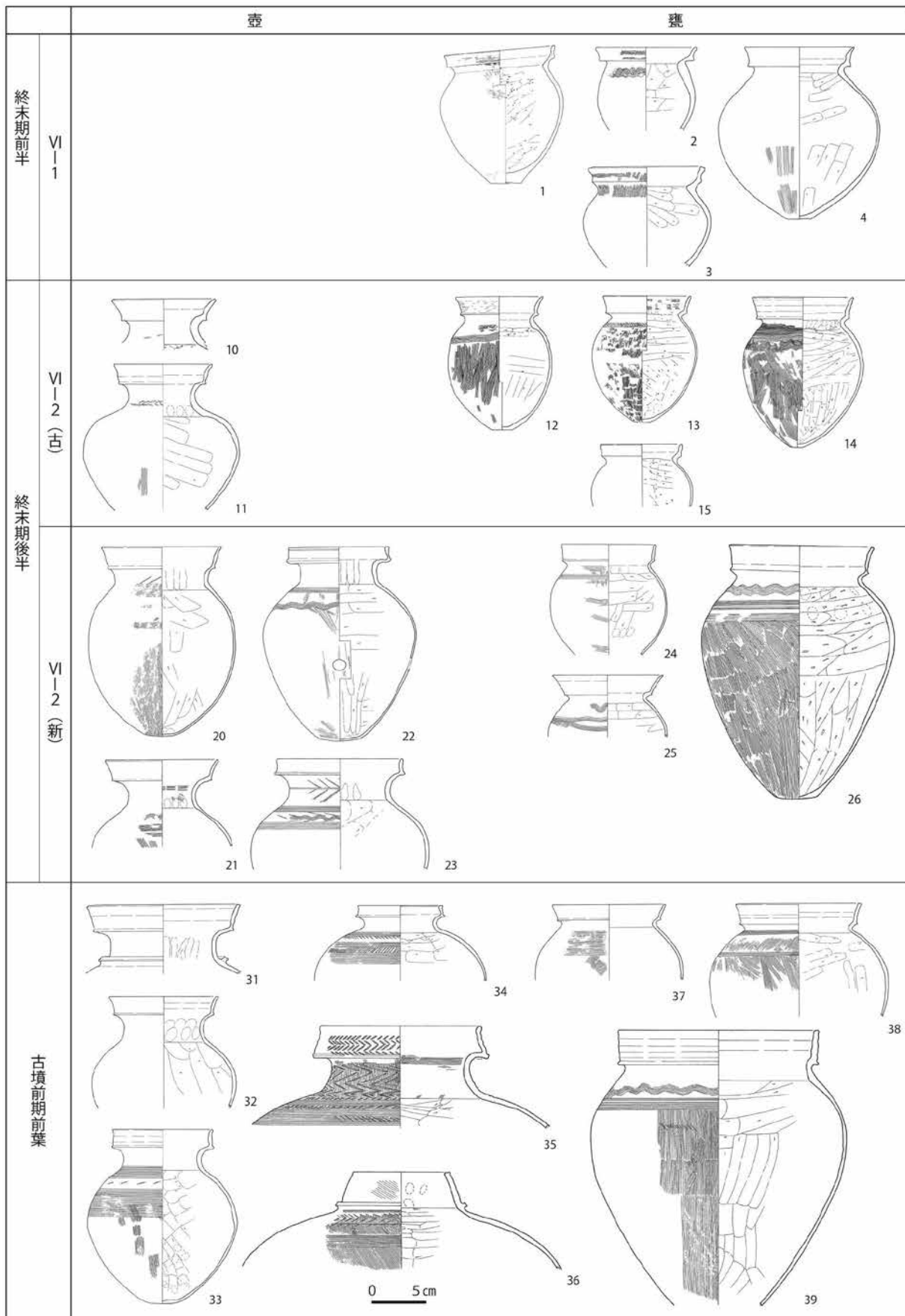


図 11-1 第VI様式と古墳時代前期前葉の土器(甕・壺)

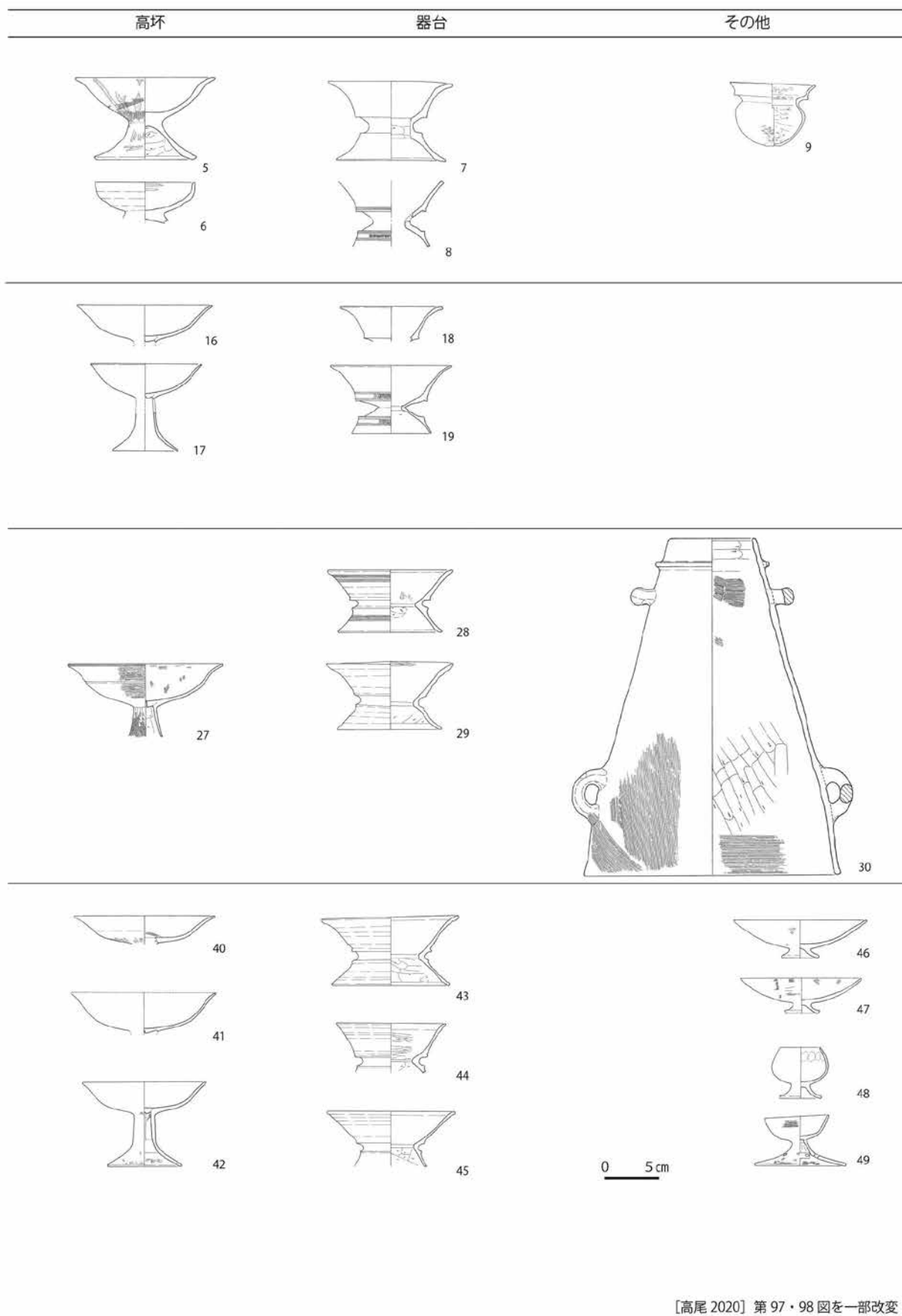


図 11-2 第Ⅵ様式と古墳時代前期前葉の土器 (高坏・器台)

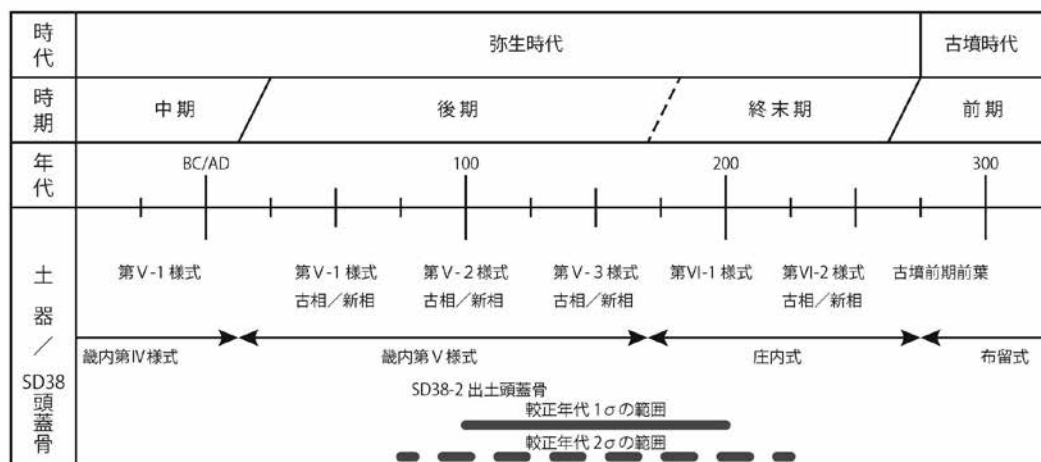


図 12 土器の年代観

前葉の土器編年案を割り当てると、第 V-1 様式の始まりが紀元 1 世紀第 2 四半期、第 VI-1 様式の始まりが紀元 2 世紀第 4 四半期、弥生時代の終わり、古墳時代前期の始まりが紀元 3 世紀第 3 四半期となる（図 12）。

2. 人骨群に伴う土器

SD38-2 に形成された人骨群に伴う土器が「松井Ⅶ～Ⅹ期」に相当するものだとすれば〔鳥取県 2002a〕、松井編年では 4 期、本稿の編年観では第 V-3 様式古相、第 V-3 様式新相、第 VI-1 様式に属する土器が人骨群に伴うことになる。暦年代では紀元 2 世紀の第 2 四半期から第 4 四半期に至る時期幅を見通すことになる（図 12）。炭素 14 年代を測定した SD38 出土人骨の較正年代の範囲は 1 標準偏差（1σ）で 2 世紀台に集中しているので、人骨の較正年代と人骨群に関する土器の年代観は矛盾しない。なお、この人骨群を遺棄葬と考える乗安は、発掘調査の所見を肯定的に捉えており、人骨群の形成を「最大で土器 4 型式」ほどの「時期幅をもった中での継起的な遺棄の累積」とみている〔乗安 2010：pp.16-18〕。なお、この場合、人骨群の形成には 70～80 年ほどの期間を要したことになる。

一方、この人骨群について「極めて集中的な出土状況は人骨が一度に埋もれた」ことを示しているという所見も発掘調査報告書には記されている〔鳥取県教育文化財団 2002a：p.53〕。人骨群に複数の小様式にまたがる土器との関係を見込みながら、その堆積は短期間に形成されたことを示唆していることになる。確かに、人骨が濃密に分布するレンズ状の堆積は層厚が 20 cm 程度であり、間層が挟まる様子もないから、70～80 年におよぶ長期間に死体が埋葬または遺棄葬されていたとは考えにくい⁽⁹⁾。

そこで、人骨群から出土した土器を明らかにし、人骨群の形成時期と期間を検討したいと考え、報告書に掲載された土器の取り上げ記録をもとに、人骨に伴う土器を確認することにした。その結果、出土地点が分かる土器が複数あったので、平面分布図（図 13）と垂直分布図（図 14・15）を作成した。なお、図 13～15 に出土地点を示した土器には、発掘調査報告書〔鳥取県教育文化財団

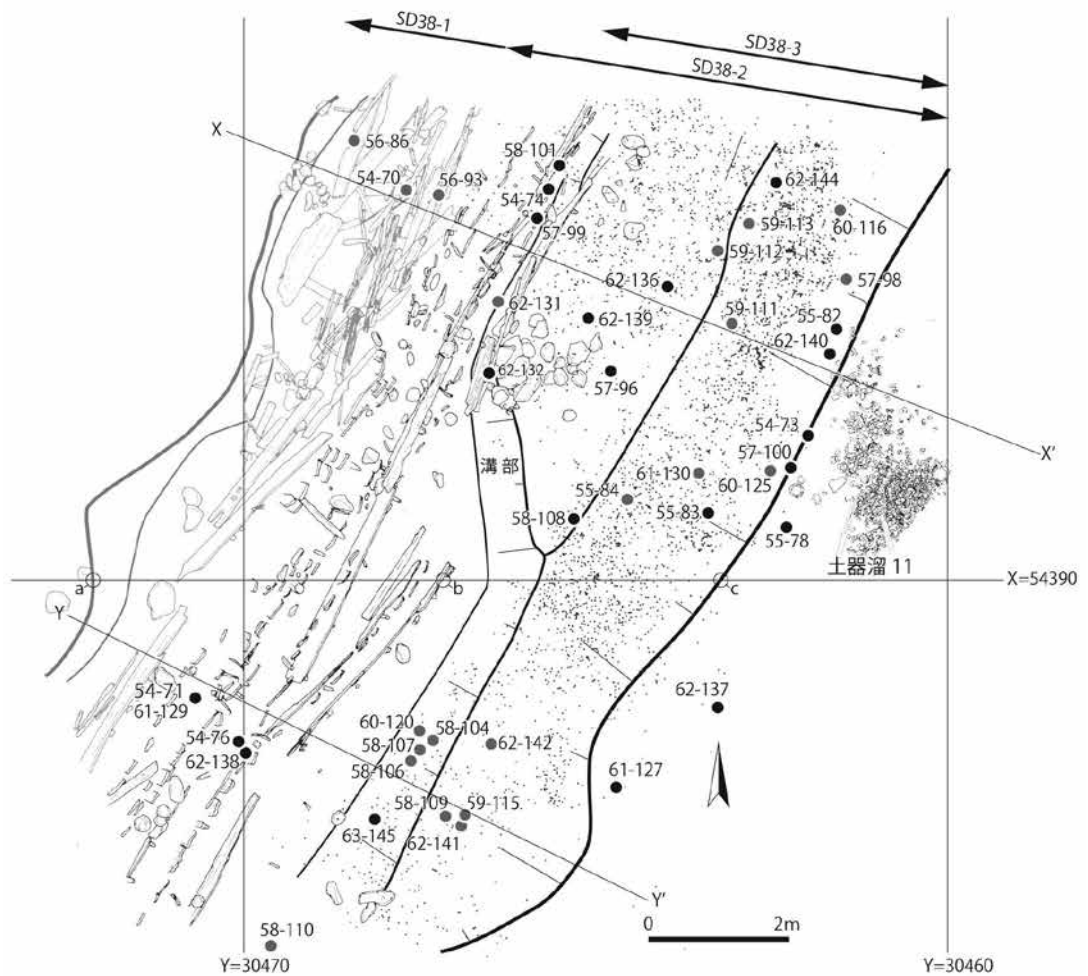


図 13 SD38 出土土器の平面分布

2002a] の挿図番号と遺物番号を付している（例：第 56 図 86 → 56-86）。

① 38-1 に伴う土器

SD38-2 に伴う木製構造物よりも西側，SD38-1 の埋土を想定する範囲からは，第 V-2 様式古相以前の土器が出土している（図 13・図 14 下段・図 16）。56-86 は弥生時代中期，第 IV 様式後半の甕である。外面胴部下半に縦方向のミガキが施され，内面のケズリが胴部最大径付近にとどまっている。54-70 は第 V-1 様式の壺である。内面のケズリがやや低い位置にとどまっているので，古相に位置づけられる。56-93 は第 V-2 様式古相の甕である。口縁部が僅かに内傾し，上端部が短く拡張している。

② SD38-2 と人骨群に伴う土器

SD38-2 の西側の掘方に護岸となる木製構造物が構築され，溝部が埋没し，人骨群が形成されるまでの順をたどり，各所で出土している土器を確認する（図 13・図 14 中段・図 15 図下段・図 17）。

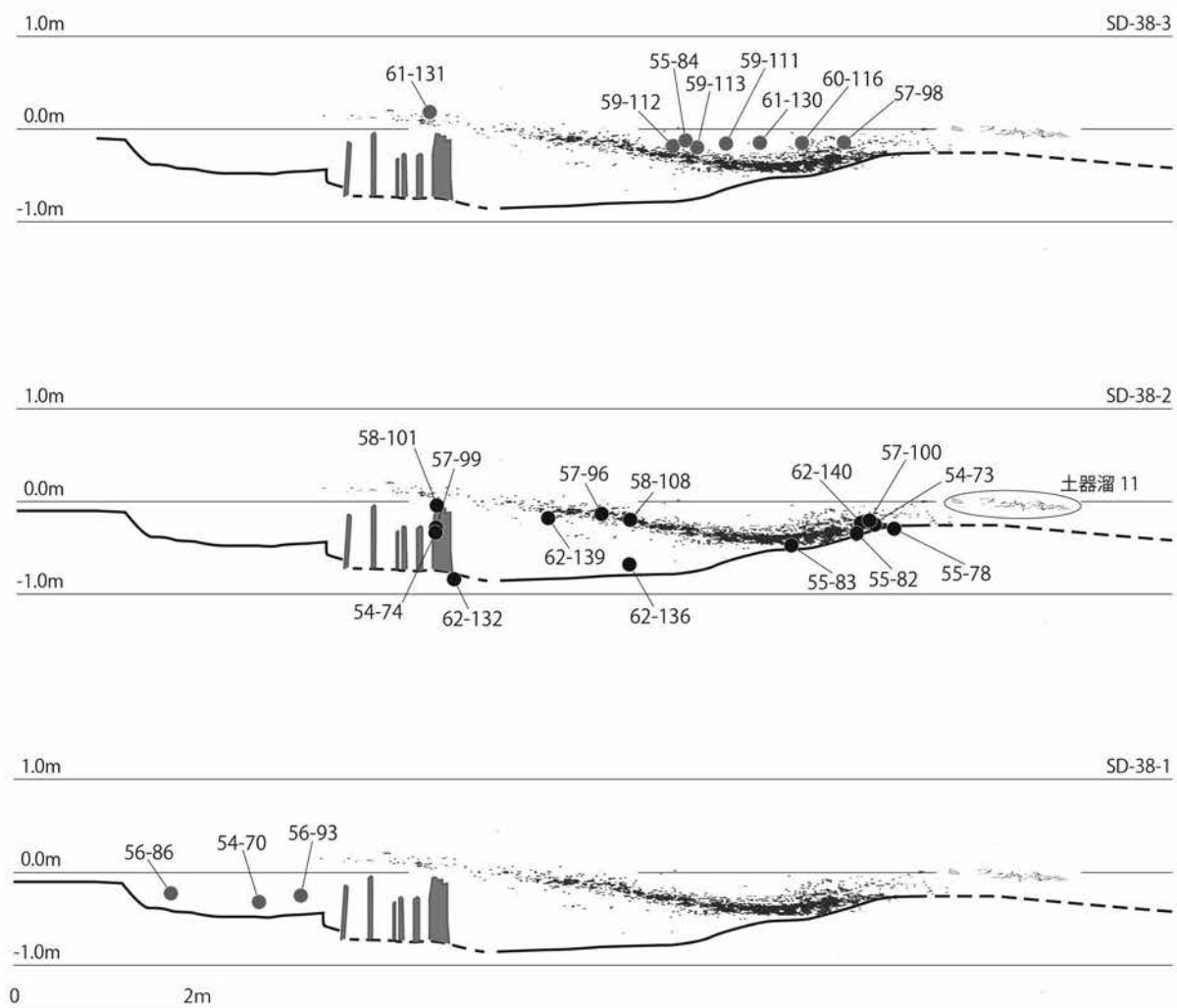


図14 SD38 出土土器の垂直分布 (X-X')

木製構造物 木製構造物の周辺からは、第V-1様式、第V-2様式、第V-3様式の土器が出土している。54-71は第V-1様式新相の壺である。口縁部は拡張していないが、胴部内面のケズリが頸部まで上がっている。63-132は第V-1様式古相の器台である。受部は拡張せず、内傾する。54-74は第V-2様式古相の壺である。口縁部は上方に拡張するが、やや内傾気味に立ち上がる。57-99は第V-3様式新相の甕である。拡張した口縁部に多条平行沈線、肩部に押し引き文を施す。62-138は第V-3様式新相の器台である。脚筒部がやや長く、拡張した脚台部に多条平行沈線が施されている。62-129も第V-3様式新相の高坏である。坏部外面は多条平行沈線が省略されている。

溝部 第V-3様式の土器が出土している。62-136は底面に近い位置から出土した器台である。拡張した受部に多条平行沈線を施す。第V-3様式新相に典型的な特徴を備える。

人骨群の直下 少量の人骨が分布する範囲からも第V-3様式の土器が出土している。58-101は第V-3様式新相の甕である。壺との中間的な形態をしており、胴部上半に2段の多条平行沈線を施し、その間に押し引き文を加えている。64-145は第V-3様式新相の大型器台である。受部の径

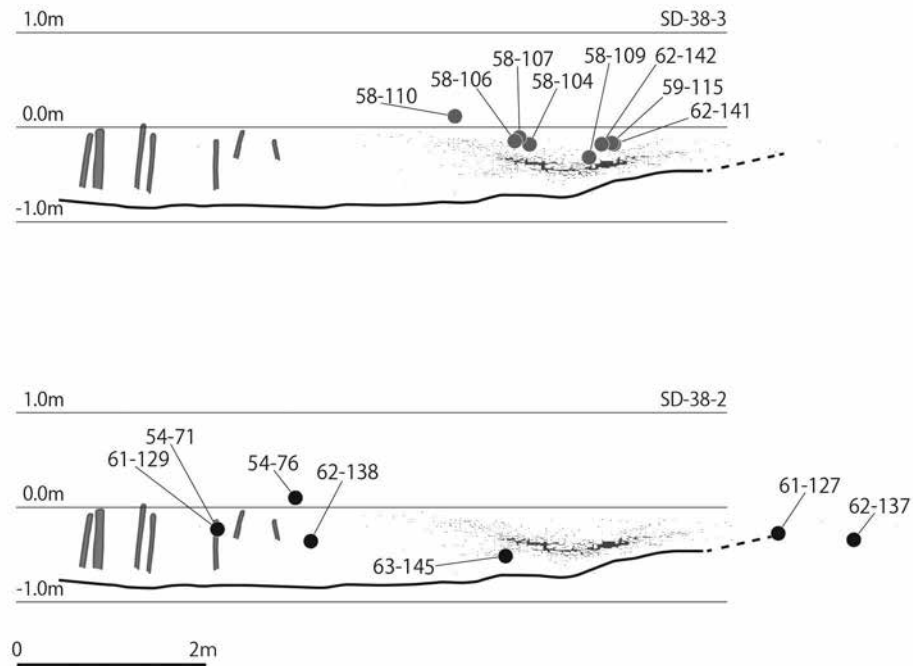


図 15 SD38 出土土器の垂直分布 (Y-Y')

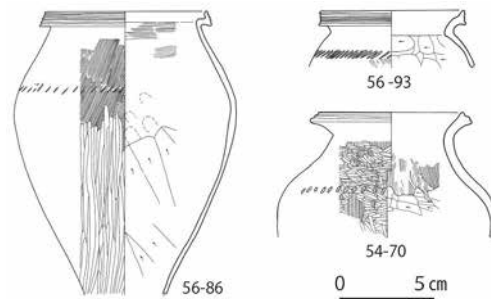


図 16 SD38-1 出土土器

が 40 cm を超える。受部に多条平行沈線と波状文を施している。62-139 も第 V-3 様式新相の器台である。拡張した受部、脚台部の全面に多条平行沈線を施す。脚筒部は短化傾向にある。

人骨群 人骨が濃密に分布するレンズ状の堆積からも第 V-3 様式の土器が出土している。57-96, 57-100 は第 V-3 様式新相の甕である。拡張した口縁に多条平行沈線に施す。肩部に 57-96 は押し引き文, 57-100 はスタンプ文を加えている。58-108 は口縁部に文様を施さない甕である。口縁部の断面形は第 V-3 様式新相に典型的な形状をしている。55-78, 54-73, 54-76 は第 V-3 様式新相の壺である。拡張した口縁に多条平行沈線を施す。55-82, 55-83 はスタンプ文などで加飾する小型装飾壺である。第 V-3 様式新相の甕や壺に伴うことが多い。62-140 は第 V-3 様式の器台である。受部を欠く。脚筒部は短化傾向にあり、脚台部は無文である。

SD38-2 の東側 SD38-2 の東側からも第 V-3 様式新相の土器が出土している。62-137 は第 V-3 様式新相の器台である。拡張した受部や脚台部に多条平行沈線を施す。62-127 も第 V-3 様式新

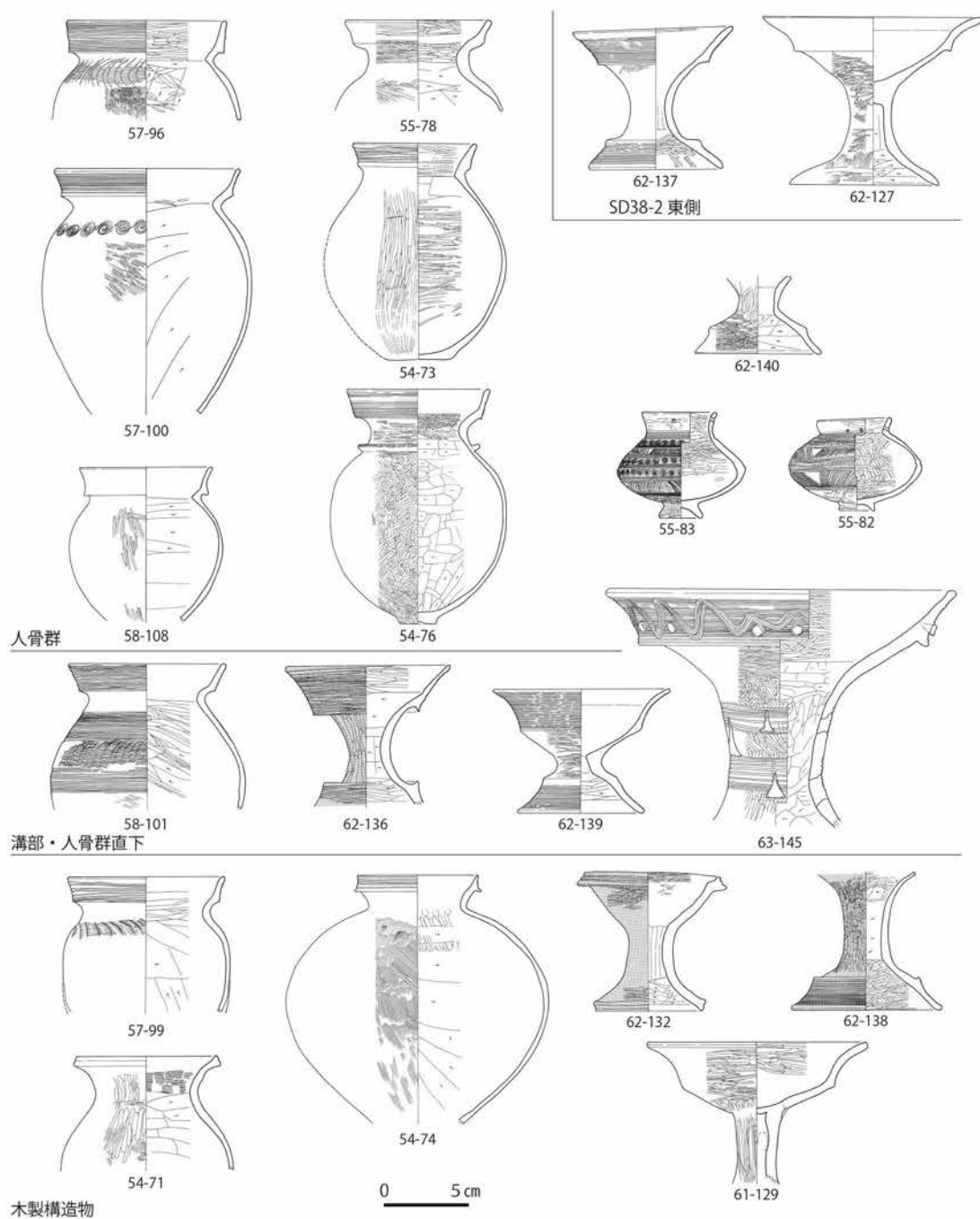


図17 SD38-2 出土土器

相の高坏である。口縁部をしっかりと拡張しているが、多条平行沈線は施されていない。また、X-X' ラインのすぐ南側に「土器溜11」という土器の集積が見つかった。人骨を含む堆積の西端に被さるような位置にあり（図13・図14中段）、第V-3様式新相に典型的な甕、壺、器台が集積されていた（図18）。

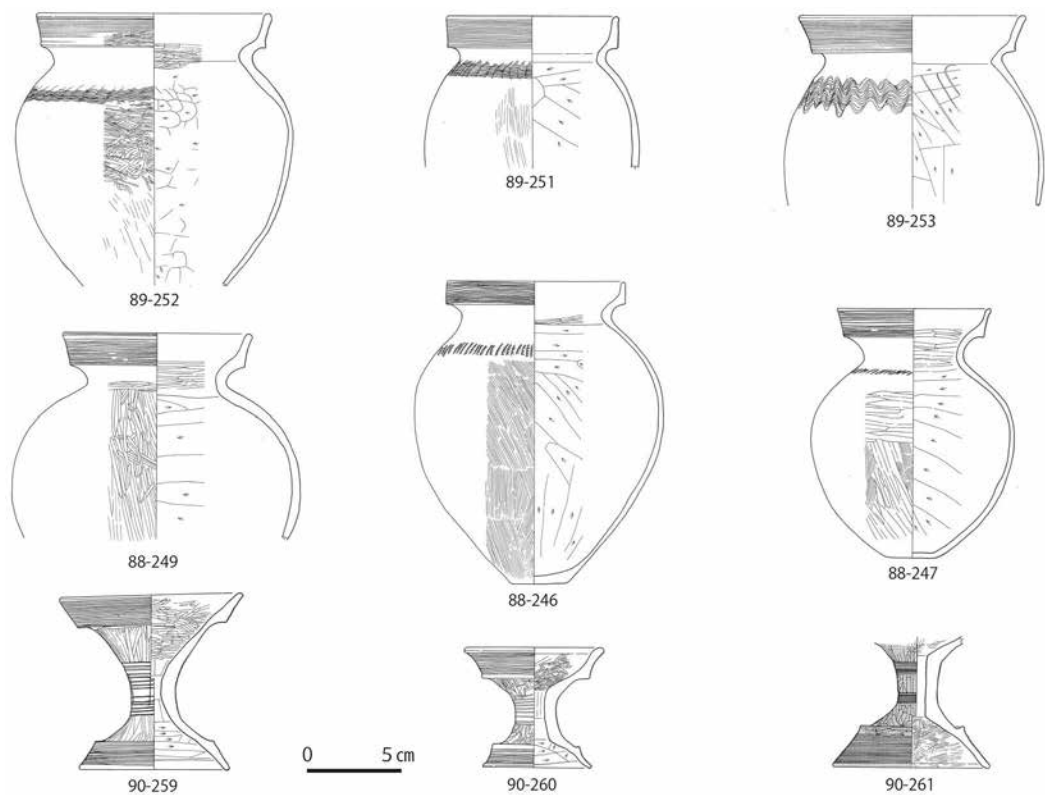


図 18 土器溜 11 出土土器

③ SD38-3 に伴う土器

レンズ状に堆積した人骨群の上に、人骨をまばらに含む堆積があり、その上部から第V-3様式新相～第VI-1様式、第VI-2様式、古墳時代前期前葉の土器が出土している。57-98, 60-116は第V-3様式新相の甕である。拡張させた口縁部に多条平行沈線を施し、肩部に押し引き文を加えている。58-109は肩部に押し引き文を施す甕である。口縁部は無文で、底部の径がやや小さい。第VI-1様式にくだるものかもしれない。58-104は第VI-1様式の鉢である。口縁部に多条平行沈線を施し、その上半部をナデ消す。肩部に押し引き文と波状文が施されている。58-110, 59-115, 59-112は口縁部が無文の甕である。58-115と59-112の肩部には波状文が施されている。いずれも口縁部にやや厚みがある。第VI-2様式古相の土器である。また、59-113は器壁が全体的に薄く、第VI-2様式新相の雰囲気 را 帯びるが、口縁部には波状文が施されている。これも古相に位置づけるのが妥当である。59-111は大型の甕である。口縁部、胴部の形状は第VI-2様式新相の特徴を備えている。実測図では底部を丸く表現しているが、実際には平底の痕跡をとどめている〔鳥取県教育文化財団2002a〕。62-141, 62-142は鼓形の器台である。脚筒部は短化しているが、受部、脚台部は縦に幅を保っているため、第VI-2様式古相のものとする。61-130は第VI-2様式の高坏である。皿形を呈する坏部に「ハ」字状に裾を広げる脚部が付く。

この他に、第VI-1様式以降に位置づけられる非在地系の土器などがある。58-106は吉備系の甕である。越敷山遺跡群（鳥取県伯耆町・南部町）18a区の竪穴住居SI04から出土した第VI-1様式

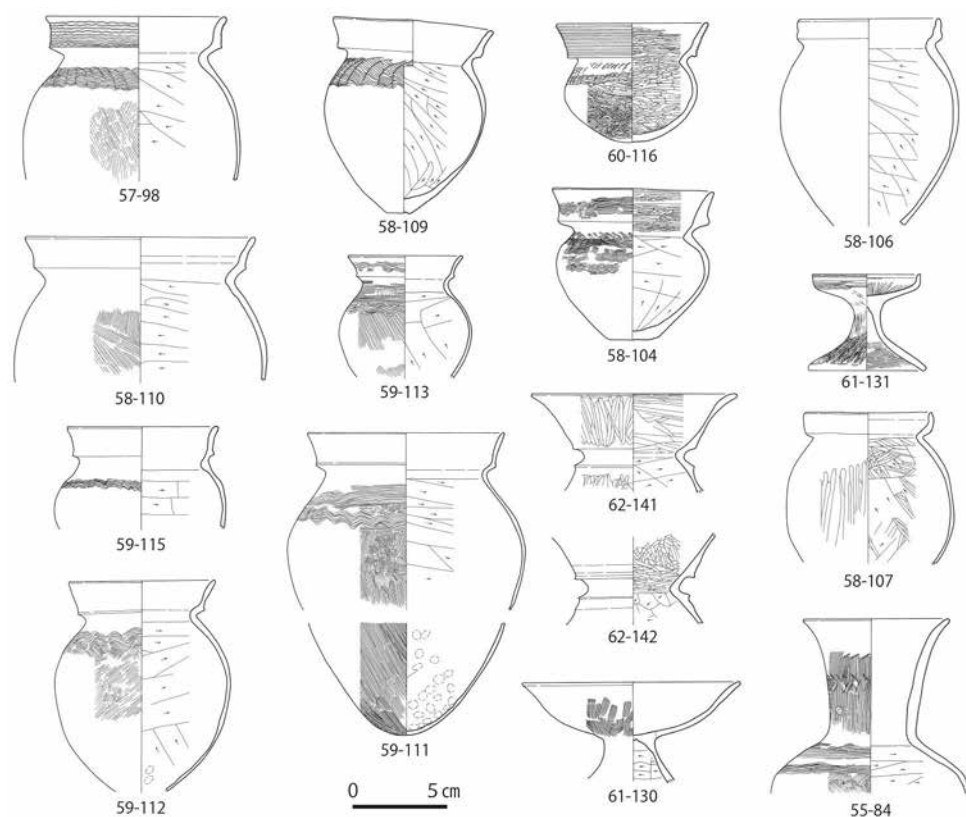


図19 SD38-3 出土土器

の土器に伴う類例がある〔会見町教育委員会ほか1994, 松井1997〕。61-131は小型の器台または高坏である。口縁端部が僅かに外屈し、脚部が「ハ」字状に大きく開く。丹後地域の西谷2式の中に形状が良く似た土器がある〔高野2006〕。西谷2式との関係でこの土器を理解するなら、第VI-1様式に位置づけられる。58-107の甕, 55-84の壺も在地には類例が少ない。58-107は口縁部が僅かに内湾し、胴部の中位に最大径がある。吉備系土器の影響がうかがわれる。

3. SD38の変遷と人骨群の形成

SD38-1からは第IV様式後半, 第V-1様式古相, 第V-2様式古相の土器が出土している。したがって, SD38-1は第V-2様式古相の段階, 紀元1世紀第4四半以降に埋没したと推測する。その後, 埋没したSD38-1を掘削してSD38-2が設けられ, その西壁の護岸として木製構造物が構築された。その周辺からは, もとはSD38-1の埋土中にあったとみられる第V-1様式新相や第V-2様式新相の土器と共に第V-3様式新相の土器が出土している。SD38-2の木製構造物は紀元2世紀第3四半期には設置されていたと考えられる。

また, SD38-2の溝部の底面の近くや, まばらに人骨を含む, 人骨群の下層からも第V-3様式新相の土器が出土している。溝部は第V-3様式新相の段階, 紀元2世紀第3四半期に微高地側から埋まり始め, その過程で持ち込まれた人骨が埋土中に散在しているとみられる。その後, さらに埋没が進み, 多量の人骨が集積され, 人骨群が形成されるが, ここからも第V-3様式新相の土器が

出土すると共に、その傍に同じく第V-3様式新相の土器が集積されていることを確認した。さらに、人骨群の上部に位置するSD38-3の範囲からは第VI-1様式以降の土器が出土している。したがって、人骨群の形成は第V-3様式新相の土器が製作、使用されていた期間、紀元2世紀第3四半期の間に完了していることになる。

IV おわりに

SD38-2の上部に形成された人骨群の年代学的調査とDNA分析によって、紀元2世紀頃の青谷上寺地遺跡における人の在り方が、各地の人が離合集散する中近世以降の都市部の集団に類似していることが分かってきた〔篠田2019, 篠田ほか2020〕。このことを歴史的に評価するためには、分析の対象となった人骨群の形成期間の長短を明らかにする必要があると考え、SD38-1・2・3及び人骨群から出土している土器を再考し、人骨群の形成時期とその期間を検討した。

その結果、SD38-2の溝部に堆積した少量の人骨を含む埋土や、その上部に形成された人骨群には紀元2世紀第3四半期に製作、使用されていたとみられる第V-3様式新相の土器が伴うことを確認した。SD38-2の溝部埋土や人骨群が堆積する範囲からは第VI-1様式以降の土器は出土していないことから、人骨群の形成は第V-3様式新相の土器が製作、使用されていた期間中に完結しており、その期間は長くとも20年程度と見込まれる。形成期間が土器2小様式以上、暦年代で50年以上にも及ぶのならば、この人骨群には生存していた時代を異にする数世代の人々が累世していることを考えなければならないが、20年程度もしくは20年よりも短期間に形成されたならば、同時に生存していた人々が集積されていると考える。そうした人々の多くが血縁関係になかったという事実は〔篠田2019, 篠田ほか2020〕、紀元2世紀第3四半期の青谷上寺地遺跡に、外部から相当多くの人が頻繁に流入していたことを示唆している。

本稿は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）「考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明」（代表 国立歴史民俗博物館 藤尾慎一郎 課題番号：18H05505）による研究の成果の一部である。また、その共同研究として、鳥取県地域づくり推進部文化財局ととり弥生の王国推進課青谷上寺地遺跡整備室が取り組んでいるSD38出土人骨の再評価の成果を含む。執筆にあたり、とっとり弥生の王国推進課の北浦弘人氏、湯村功氏、高尾浩司氏、馬路晃祥氏から有益な御教示、御助言をいただいた。

なお、現在、青谷上寺地遺跡整備室ではSD38から出土している未報告資料の再整理を行っている。そのため、今後、本稿の内容について修正、見直しが必要となるかもしれないことをお断りしておく。

註

(1)——炭素14年代を測定した頭蓋骨3個体の較正年代はいずれも似た範囲を示している。2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) の暦年代の範囲は紀元1世紀第2四半期～3世紀第1四半期である。よって、古い方では弥生時代中期にはさかのぼらず、新しい方では古墳時代前期には

くならない。青谷上寺地遺跡SD38出土人骨群の肋骨を対象に行われた炭素14年代測定でも1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) の暦年代範囲は紀元2世紀台に集中している〔米田ほか2020〕

(2)——報告書に掲載されている人骨の垂直分布図〔鳥

取県教育文化財団2002a] 第52図)と同じ位置で作成された断面図〔鳥取県教育文化財団2002a] 第49図)は同一の縮尺であるが形状が一致しない。縮尺を点検した結果、人骨の垂直分布図〔鳥取県教育文化財団2002a] 第52図)は水平方向の縮尺が100分の1なのに、垂直方向の縮尺は40分の1であった。そこで、図5の断面図では垂直方向の縮尺を100分の1に修正して人骨の垂直分布図を作成した。

(3)——青谷上寺地遺跡から出土している動物骨には、イヌの嚙痕が残る骨が多くあり、頭蓋部分を噛み砕かれたものも報告されている〔井上ほか2002]。これらは地表に露出した状態にあったものと推測される。また、SD38-2に形成された人骨群からは内腔に脳の一部が残る頭蓋骨も出土しているが、地表に放置されていたならば、それらは腐食して失われているはずである。

(4)——攪乱によって生じたとみられる削平や破損が観察できる骨が一部に確認されていることも、この仮説の根拠の一つとなっている〔井上ほか2002]。

(5)——人骨の散乱要因について、県道8区の発掘調査を担当した湯村功は、SD38-2の近隣に死後まもなく埋葬された死体がすぐに掘り起こされて、SD38-2に再埋葬されたことで、人骨が散乱したと論じている〔湯村2002・2003]。しかし、乗安は「近くに集団墓域が認められず、また埋葬直後にこれだけの遺体を掘り起こして再び埋め戻すという必然性に乏しい」として、湯村の仮説に否定的である〔乗安2010:p.15]。私は、解剖学的位置をとどめない死体や骨がSD38-2に埋められたという結論には賛成する。ただし、この仮説は、SD38-2の周辺に死後まもない大量の死体を埋葬した墓域があった

という想測を前提とするが、このことを既存の情報によって説明できない。この人骨群の成り立ちを考える上で、人骨の散乱原因は解決すべき課題の一つであり、改めて検討を必要とする。

(6)——因幡地域・松井X期と東伯耆地域・松井IX期に示された器台〔松井1997] 図2の40・41と図3の142・143)や、因幡地域・松井XI期と東伯耆地域・松井X期に示された甕〔松井1997] 図2の44・45と図3の147・148)は同一の型式であり、併行関係の理解に前後1期のずれが生じている。

(7)——鳥取県内に分布する第V様式の土器には、小型の装飾壺など一部の器種の在り方に地域性が認められるが、主要器種である甕、壺、器台、高坏の特徴や変遷に大きな違いはないので、ここでは最も基礎資料が充実している鳥取県西部地域の編年をもとに、SD38出土土器の再検討を行う。

(8)——県道8区のSD38の報告では、松井V・VI期を弥生時代後期初頭～前葉、松井VII～Xを後期中葉～後葉、松井XI～XIII期を後期末～古墳時代初期としている。

(9)——この人骨群からは内腔に脳が残る頭蓋骨が出土している。この個体は死後まもなく土中に埋められたと考えてよからう。ただし、たくさんの個体が全て死後まもなく土中に埋められた保証はない。どこかで白骨化した骨も一緒に埋められているかもしれないからである。人骨群が一時期に形成されたとしても、各個体の死期にはばらつきがあるかもしれない。しかし、この問題を検討するためには人骨の観察、分析など別の手続きが必要となる。本稿の目的は個々の人骨の死期の検討ではないので、このことに触れない。

参考文献

- 会見町教育委員会・岸本町教育委員会編 1994:『越敷山遺跡群』第2分冊
井上貴央・松本充香 2002:「青谷上寺地遺跡から検出された人骨」『青谷上寺地遺跡4』第2分冊、鳥取県教育文化財団, pp.436-469
井上貴央 2006:『青谷上寺地遺跡の弥生人と動物たち』鳥取県教育委員会
井上貴央 2009:『青谷の骨の物語』今井書店
篠田謙一 2019:「DNAからみた青谷上寺地遺跡の弥生人」『とっとり弥生の王国・2019Spring 特集 倭人の真実』鳥取県埋蔵文化財センター, pp.12-16
篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登 2020:「鳥取県鳥取市青谷上寺地遺出土弥生後期人骨のDNA分析」『国立歴史民俗博物館研究報告』第219集, pp.163-177
清水真一 1992:「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編, 木耳社, pp.355-412
高尾浩司 2020:「妻木晩田遺跡における外来系土器の受容と地域間交流」『史跡妻木晩田遺跡松尾頭地区墳丘墓群発掘調査報告書—第33・34次調査, 墳丘墓群総括報告—』鳥取県立むきばんだ史跡公園, pp.141-161
高野陽子 2006:「丹後地域—疑凹線文系土器の様式と編年—」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター, pp.225-242

-
- 鳥取県教育文化財団編 2001：『青谷上寺地遺跡 3』
- 鳥取県教育文化財団編 2002a：『青谷上寺地遺跡 4』本文編 1
- 鳥取県教育文化財団編 2002b：『青谷上寺地遺跡 4』本文編 2
- 鳥取県埋蔵文化財センター 2017：『弥生時代の港湾集落 青谷上寺地遺跡』
- 乗安和二三 2010：「弥生時代における遺棄葬—青谷上寺地遺跡出土の殺傷痕人骨等を中心として—」『陶垠』第 23 号，財団法人山口県ひとづくり財団 山口県埋蔵文化財センター，pp.13-42
- 濱田竜彦 2003：「鳥取県西部地域の弥生時代後期土器—甕と壺を中心に—」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-1，立命館大学考古学論集刊行会，pp.503-522
- 濱田竜彦 2009：「山陰地方の弥生集落像」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 149 集，国立歴史民俗博物館，pp.233-311
- 濱田竜彦・坂本稔・瀧上舞 2020：「鳥取県鳥取市青谷上寺地遺跡出土弥生中・後期人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 219 集，pp.147-162
- 松井潔 1997：「東の土器，南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第 19 集，古代吉備研究会，pp.40-67
- 森岡秀人 1984：「大阪湾沿岸の弥生土器の編年と年代」『高地性集落と倭国大乱』雄山閣，pp.225-262
- 森岡秀人 1996：「年代論と邪馬台国論争」『古代史の論点 4 権力と国家と戦争』小学館，pp.111-140
- 森岡秀人・西村歩 2006：「古式土師器と古墳の出現をめぐる諸問題—最新年代学を基礎として—」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター，pp.507-590
- 湯村功 2002：「殺傷痕のある人骨をめぐる諸問題」『青谷上寺地遺跡 4』本文編 2，鳥取県教育文化財団，pp.507-512
- 湯村功 2003：「ふたたび青谷上寺地遺跡の殺傷痕人骨をめぐる」『立命館大学考古学論集』Ⅲ-2，立命館大学考古学論集刊行会，pp.631-642
- 米田譲・井上貴央 2020：「青谷上寺地遺跡出土人骨の炭素・窒素同位体と放射性炭素年代」『青谷上寺地遺跡発掘調査研究年報 2019』鳥取県地域づくり推進部文化財局，pp.45-56

(明治大学資源利用史研究クラスター，鳥取県地域づくり推進部文化財局)

(2020 年 12 月 11 日受付，2021 年 5 月 24 日審査終了)